

## たった4年で人生は変わる！

経営情報学部 4年 米倉 聡之介

私は高校卒業後、漠然と「マーケティングを学びたい」という思いがあり、実学を学ぶことのできる多摩大学へ、2012年4月に進学をしました。入学後、最初の数ヶ月間は、今振り返ると非常にだらしなく大学生活を過ごしていたように感じます。授業とアルバイトをただ毎日「こなす」だけでした。

しかし、2012年12月に1ヶ月間の入院生活を体験し、それまでの人生では病気とは無縁だった私が、初めて行動を制限されると同時に、出口の見えない入院生活中に「それまでの人生の振り返り」「今後どのように生きていくべきなのか」という2点について、考え抜きました。考えれば考えるほど、それまでの人生は「できるかできないか」という基準で、様々な行動の意思決定を行っていたことに気がつき、そこで感じた「後悔」から、退院後は意識的に「やるかやらないか」で物事を考えるようにしました。また、同時に将来は日本ではもちろんのこと世界を相手にも活躍のできるビジネスパーソンになりたいと感じました。

しかし、退院後に人生で初めて受けたTOEIC公開テストの点数は175点(満点：990点)でした。この驚くくらい低い英語力が、私の目標とする将来像に向けての挑戦のスタートでした。そこから「目標とする将来像」に向けて、やるべきことを逆算して様々なことに挑戦してきました。

今回は、前述した入院生活が終わった後から、現在に至るまでの間にどのような学生生活を送っていたのかを紹介できればと思います。

まず、取り組んだのが「語学学習」でした。通学時間や家で行う独学はもちろんのこと、当時注目され始めていたフィリピンへの語学留学を1ヶ月間経験しました。この短期の語学留学は、私にとってまとまった期間海外で暮らす、初めての機会でした。1ヶ月という非常に短い期間にもかかわらず、非常に多くのことを学びました。それまでは、「英語」を学習することが重要だと考えていましたが、この留学を通じて本当に大切なのは「英語で何を勉強するか」ということだと気付かされました。

フィリピン留学からの帰国後、韓国済州島で行われた、JEJU FORUMに参加をしました。世界中60数ヶ国から、学生から経営者、政治家までが参加をする国際フォーラムで、私はその中の一つのセッションである、アメリカ、中国、韓国、日本の学生で構成される「学生会議」において、日本からの参加学生代表として、「アジア時代における日本の役割」という内容でスピーチをさせていただきました。この国際フォーラムを通じて、様々なバックグラウンドを持った、世界中の国籍の学生と意見を交わし学ぶ面白さを実感しました。



韓国・済州島で行われたフォーラムでスピーチ後に各国のスピーカーと

その後、私はアメリカ合衆国ジョージア州のバルドスタ州立大学へ留学をしました。ここでは、主に国際経営やマーケティングの講義を履修していました。留学前から、それらの科目は履修していたのですが、世界中から集まる学生と共に学び、議論やグループでの実践的なワークを積み重ねることによって、様々な学びがあると同時に、もっと多くのことに知りたいと感じさせられました。その結果、大学で学んだことを今度はビジネスのフィールドでアウトプットしたいと思うようになりました。そして次の日には、米国でインターンシップを受け入れてくれる企業がないかを探し始め、数週間後には、企業を見つけSkypeでの面接を受けたのちに採用となりました。

セメスターの終了後、日本への一時帰国をはさみ、今度はニューヨークへと移りました。ニューヨークでのインターンシップは自分自身が将来どのような人物になりたいのか？ということを考える良いきっかけとなりました。インターンシップでは、様々なプロジェクトに関わらせていただきましたが、特に印象に残っているのは某日系大手メーカーのEXPO開催をお手伝いさせていただき、忙しくも貴重な経験をした日々です。多くの業務を任せられる一方で、自分の力不足を感じる日々でした。業務や現地で働くビジネスマンの方々と話した経験を通じて、私のビジネス遂行能力の低さや教養の低さを感じたことで、帰国後に取り組むべきことや、将来どのような働き方をしていきたいのか等が以前に比べ明確になりました。

そして、インターンシップを終えて日本に帰国した後は、すぐに就職活動へとシフトしました。就職活動は順調に進み、内々定をいただいた複数社の中から最終的に、当初から一番行きかかった日系航空会社の総合職という道を選びました。就職活動を終えた現在は、勉強の傍、ベンチャー企業でのインターンシップに力を注いでいます。

そして、来年4月の入社以降は、自分自身の価値をどのような形で発揮できるかを試行錯誤しながら、将来を見据えつつ目の前の仕事に全力で取り組んでいこうと思います。

どん底からここまで挑戦を続けてくることができたのには、多摩大学を選んだからだと考えています。小規模の学校ということもあり、教授陣が様々な形で私の挑戦を助けてくれました。(留学中に現地で働いている方を紹介してくれた先生、お守りをくれた先生もいました！)今回の寄稿で私が一番伝えたいのは「たった4年で人生は変わる」ということです。

大学入学後に将来について悩む人や、大学生活に満足していない人、やりたいことはあるのに踏み出せていない人は是非、新しいことに思いつき挑戦してみてください！



よく共に勉強し遊んだアメリカ留学中の友達

## 〈木村知義プロジェクトゼミ〉

# メディア実践論の制作現場から

### 人に伝わる作品をめざして

経営情報学部 2年 南直人

「メディア実践論って何だ？」

2年の秋学期がはじまる。さて、木曜日の2限をどうしようか、と考えていた時のことだ。最初、この時限にあるもう1つのプロジェクトゼミにも興味があった。だが、1年の秋学期に取ったことがあるので、「1度、メディア実践論を見てみて…」と考えた。

秋学期スタートの教室へ行ってみた。放送現場でのディレクターの仕事の図解をもとに制作の流れだとか企画をどう生み出すのかとか、なんだか難しそうという印象。今まで全く経験のないビデオカメラを使った実習があると聞いて不安が増すばかりだった。

私が「こんなこと、やったことないのですが、できますか？」と質問すると、先生は「なんでも始める時は、はじめてだよ。やったことがないからできないなんてことはないね」と言ってくれた。まだ不安を抱きつつだけれども、経験したことのないことにも挑戦してみようと思った。履修してからこれまで2つの「大きな経験」をした。私にとっての「未知との遭遇」だった。

1つ目は「教室を出て学内をカメラで撮影してみる」という経験。動きのある映像を撮ってみたいと思ったのでフットサルをしている学生たちにカメラを向けた。しかし、教室に戻って撮った映像をみんなで見直してみると、船酔いみたいに気分が悪くなりそうなぐらい映像がブレブレで、揺れている。でも、何を撮ろうかと企画を考える楽しさと、考えた企画をカメラに収める「撮る面白さ」がわかった。しかし、撮影する技術が伴っていなかったため、「作品をみんなに見せる」といういざばん大事なところができていないことがわかった。見る側のことを考えて作らなければならないのだと学んだ。

もうひとつの「大きな経験」は、「リレー講座でのカメラマン」。木曜日4限の「リレー講座」で先生方が講義されているところを撮影するスタッフだ。「せっかくカメラ実習したのだから、リレー講座のカメラマンやってみない？」と教室で先輩から声をかけられた。「エッ？」と思ったが、面白そう！すすめられるままに引き受けてしまった。メディア実践論を履修するまで、リレー講座のカメラの手伝いを学生がしていることをまったく知らなかった。私が撮っている映像が、講座を受けている学生達の見えるモニター、一般の方達の見ているスクリーンに映し出されているのに感動した。自分の撮り方次第でもしかしたら学生達の成績に関係してくる可能性もあるかもしれないと考えると気が引き締まった。この経験からも、見る側に伝わる映像をという意識で取り組むことが大事なのだと、あらためて学んだ。

いま、私は、教室で学んだ「デジタルストーリーテリング」(DST)という手法の作品作りに取り組んでいる。DSTというのは、写真によるスライドショーでストーリーを構成し、それに合わせて自分でナレーションを入れて作る。夏休みに「海外研修」で行った中国での体験をこのDSTで表現してみたいと考えたのだ。体験したこと、そこで感じたこと、思ったことを写真でどう表現するのか、けっこう難しい。でもなにかワクワクする。

考えているうちに、ほかにも取り組んでみたい企画が浮かんできて、面白くなってきた。

こうして、2つの「未知との遭遇」から世界がぐんと広がったような気がする。そしていま、学んだことを生かして、人に伝わる作品を作り上げたいと思っている。



う〜ん、難しい！初めてのカメラ実習



心に残る中国との出会い・広東財経大

### 秋からスタート！ ユーチューバー・スギタの挑戦

経営情報学部 3年 杉田 健人

「メディア実践論」には秋から参加した。春から取り組んでいる学生もいて、半年の差があるので、教室に足を踏み入れた時「ちょっとタイミングを失ったな。早くに受けていればよかった」という気持ちで、正直不安があった。

なぜこのプロジェクトゼミなのかといえば、小さいときからメディア業界に興味を持っていたこともあるが、春学期に木村先生の「現代メディア論」の授業を受けてさらに興味が深まったからだ。メディアについてより実践的な勉強ができるだろうと思った。

先生は大変エネルギーが豊富だ。NHKで仕事をしてきたこともあり、メディアの世界に精通しているし、話に説得力がある。そして、学生の様子をよく捉えている。ぶつかっている問題や、悩んでいたりに多くのヒントをもらうことがある。

私は正直、言葉で自分の内面を表現することが苦手だ。でも、ビデオ制作を通じて、自分にも何か表現できるのではないかという期待があった。そして、教室でビデオドキュメンタリーについて学び、気づきが沢山あった。

実は、私はYouTubeで動画を発信してみようと思い取り組んだ経験が少しある。一応YouTuber(ユーチューバー)ということになる。今までは、動画を撮る時にカメラの動かし方は気にせずとにかく撮って、後で編集ソフトを使って加工していた。しかし、教室で見たカメラワークを生かして作る作品は、自然の時間が感じられて現実感があり驚きだった。

また、先生が話してくれた想田和弘さんの「観察映画」論は大変刺激的だった。ニューヨークでNHKのテレビ番組の制作に携わっていた想田さんは、従来のテレビ番組につきものの「予定調和」に飽き足らず、リサーチも行わず、台本を書かず、テーマも立てず、臨機応変に粘り強くカメラを回すという「観察映画」にたどり着いたという。つまり、頭の中で決めたとおりに撮るのではなく、目の前で起きていることや人間をじっくり見つけ、それに迫ることが大事だというのだ。そうすれば多様な解釈を残せることにつながって、観る人が能動的なとらえ方ができるということなのだろうと、私は理解した。

もうひとつ、ゼミの仲間が撮った作品を見て構成や音の処理、字幕の位置や色などについて意見を出し合う経験をした。作品をまわりの人に評価してもらってアイデアを出し合い、手直しを繰り返すことで作品の質を上げていくことができるのだ。人と一緒に考え、意見を出し合うことの大切さを知ったことも成果だと思う。

いま、企画について一生懸命考えている。色々な「ネタ」を思いついても、見る人にとって興味を持てるだろうか考えるとなかなか絞り切れない。多摩大生の「若者の素顔」を描いてみたいと思ったり、YouTuberといわれるネット上で活躍する人たちにフォーカスしてみたら現代の若者の「一面」を捉えることができるかもしれないと思ったり。悩む時間ばかりが過ぎていき、企画は本当に難しい。

「メディア実践論」の教室にとび込んで、戸惑うこともいっぱいあるが、私にとって得たものは大きい。動画作品を作る技術だけではなく、伝え手が、どう伝えたいかということや、受け手にどう受けとってほしいのかということまで深めて制作する視点を持つこと。これは、私にとって新しい発見だった。ここで学んだことを生かして、これから色々なジャンルの作品作りにチャレンジしていきたいと考えている。



PCとにらめっこ、ただ今制作中



カメラワークは映像表現の基本だ！

## 台湾での学生生活と留学で培ったこと ～大学生活を振り返って～

グローバルスタディーズ学部 (SGS) 4年 鈴木 千佳恵

私は現在 SGS の 4 年生で、2017 年の春から新社会人になる。そのため、最近は授業とゼミ、そしてバイトと、残り少ない学生生活を楽しむよう努めている。

就職活動の中でよく聞かれた「大学の学生生活の中で最も印象に残った出来事」。これに対して、私は必ず「一学期間（約半年間）行った交換留学」と答えていた。交換留学生として行った台湾での留学生活は、学生生活だけの話にとどまらず、自分の人生の中でとても意義のあるものだと感じるからである。今回、その留学生活で私が何を得たのか、そしてそれはどのように活かすことができるのか、この二点を中心に述べていく。

まず、留学生活で得たことについて述べていく。元々、大学生活の中で長期間の留学に行くことが自分自身の目標であった。しかし、留学には費用がつきものだ。なるべく費用を抑えるために決断したのが交換留学だった。交換留学は、ある一定の基準を満たしていれば SGS に在籍する費用のみで、海外の大学で学ぶことができる。もちろん、大学の代表として向かうため、楽なことではない。自分の英語に全く自信もない。しかし、自分への挑戦としてこの交換留学を選んだ。また、SGS では英語を介して授業を受けていることから、英語だけでなく他の言語も学習してみたいと以前から考えていた。そこで、以上の条件に合う台湾の大学に行くことを決意し、現地で英語を使用しながら中国語を学ぶ意欲を示したのだ。結果的に、台湾へ行く前よりは、自分の英語も中国語も上達したという実感はある。留学を経て得たことは、語学力であると言い切ることに躊躇いは感じるが、それも大切な一つの要素であることに間違いはない。また、それよりも自分の中で得たものとして大きく存在しているものは、留学を経て築きあげた人間関係である。多様な国籍の友人たちができたこと、それぞれの国の文化や思想を話し合っただけで知ることができたこと、その話し合いの中で感じたもの、全てが自分の刺激になっていた。もちろん、今でも彼らと交流がある。彼らとの交流が私の中で大きな活動力となっているのだ。

特に、友人たちとの交流で印象に残っていることは、中国語の授業のための勉強会である。現地の友人にネイティブな単語の発音をしてもらい、苦勞しながらも真似たり、わからない部分は念入りに質問して聞いたり、授業に追いついていこうと復習に重点をおいて勉強していた。何気ない日常の一コマではあるが、その

ような大変な思いをしたことも留学ならではの魅力ではないかと感じる。

次に、上記で述べた留学で得たこと（語学と人間関係）をどのように活かすことができるか述べていく。語学に関しては、まだまだこれから多くの勉強が必要であると感じる。先ほども述べたとおり、留学以前よりは上達していることは事実だが、さらに海外の人と話を掘り下げていくには力が足りない。このように自分の実力を知ることや、改めて自分の目標を作ることができることは、留学を終えたからこそだと感じる。また、私は社会人になると海外の取引先との交流が必須になる。勉強してきた語学だけでなく、留学生活または大学生活で学習してきた、人との接し方をそこで活かせる可能性は十分にあると感じている。そして、人間関係については自分の長い人生の中で大きな糧となるであろうと感じている。現代ではインターネットがあるため、連絡したいと感じた時にすぐに連絡を取り合うことができる。実際に、彼らが日本に遊びに来たときはインターネットを通じて連絡しあい、再び会うこともあった。反対に、特に用がなくても連絡しあうときもある。住む国も、話す言語も、人種も違うが、大切な友人たちであることに変わりはない。縁あって知り合えた彼らとこれからもお互い刺激しあえる関係を続けるためにも、その意欲がまた新しい挑戦へ向かうことに活かせるのではないだろうか。

このように、留学で培ったものは多かった。大学 4 年間の生活を全て考えても、私自身の中では大きな出来事になっている。もちろんのこと、その他にも嬉しかったこと、悲しかったこと、苦しかったことは数え切れないほどある。しかし、そのどれもが自分自身が選択した道であり結果であることは事実である。春から社会人として社会に出ることに不安を感じ、まだ学生でいたいと思うことも多々ある。しかし、大学生活で経験してきたことを忘れずに、新社会人として臨んでいきたい。

最後に、今後の人生の中での小さな目標を述べていく。留学を決意するまで、私は英語が出来ないことに苦しさや焦りを感じ、向こうでうまく過ごすことができるであろうか、親しい友人ができるであろうかという不安を募らせていた。しかし、似たような気持ちを感じることは、この先にもあると予測する。そのような壁にあたったときに、今まで自分自身がどのように行動して乗り越えてきたのかを思い出して解決していきたいと考えている。



留学生同士で食べた最後の夕飯。学校近くの町の火鍋屋さんで食事をして、その後、食後としてかき氷や豆花（台湾のデザート）を食べた。



一番仲の良かった韓国人の 2 人。留学先では寮に住んでいたが、寮の部屋も隣同士で、よくご飯も一緒に食べていた。

## 留学生歓迎会

経営情報学部学生会執行部 1年 吉田 京悟

平成 28 年 9 月 29 日 (木) の昼休みに、留学生歓迎会が行われました。この歓迎会は 9 月より来日した交換留学生を歓迎し、交流を図ることを目的の主として開催されました。前半には食事会が開かれ、本学の在学生・教授と留学生が交流する姿などが見られました。留学生はチキンカツが好きだと聞いて学食に用意していただいたこともあり、大変盛り上がりました。後半には日本の文化を知っていただくためスライドショーで文化とあずま袋というものを紹介させていただきました。紹介の一環としてアニメの写真を見せたところ「おお」という声が上がったので、やはりアニメは万国共通なのかと改めて日本のサブカルチャーの力を感じました。あずま袋というものは手ぬぐいを縫い合わせ、その中に様々なものを詰めることができます。そしてあずま袋としての役割を終えたら今度は糸をほどき、またあらたに手ぬぐいとして使用できるのが大きな特徴です。今回はこれを交流の一環として、あずま袋に日本の駄菓子を詰め合わせたものを留学生にプレゼントしました。留学生たちにも喜んでいただけたようでよかったです。最後に記念撮影をし、無事終わることができました。



## クリスマスツリー設置

経営情報学部学生会執行部 1年 渡邊 健史

ハロウィンが終わり、世間はすっかりクリスマス仕様になりました。多摩大も遅れをとらないように平成 28 年 11 月 2 日 (水) の昼休みにアゴラ横に大きなクリスマスツリーを建てることにしました。当日は交換留学生の皆さんと多摩祭実行委員の皆さんがお手伝いに来て下さり、ツリーの組み立て、飾り付けをしてくださいました。皆さんのご協力のお陰で 5 メートルもある巨大ツリーが完成しました！予想より凄く大きい物でしたので完成してライトを点灯すると大変迫力があり、感動しました。

その感動を友人に伝え、ツリーに案内すると「てっぺんに星ないじゃん！」と言われました。ほ、星…なるほど…ツリーのてっぺんには星が必要なんですね。来年までには用意しておきます。

学生会執行部はこれからも大学を盛り上げていきますので、どうぞよろしくお願い致します！



## 第 28 回多摩大学多摩祭グローバル・フェスタ 2016 in TAMA

多摩祭実行委員長 2年 玉木 真悟

第 28 期多摩祭実行委員は、3・4 年生がおらず 1・2 年生 9 人でのスタートとなりました。先輩方のいない中、五里霧中で多摩祭の準備をしている中で、教職員の方々や学生会、多摩大学に関わりある全ての方のお力を借りて多摩祭を形のある物にでき、来場者の皆様楽しんでいただける多摩祭になりました。

001 教室を使った企画ではお笑い芸人の“NON STYLE”と“相席スタート”を招いた「お笑い LIVE」、アイドルグループを招いた「音楽 LIVE」そして毎年恒例の「ヒーローショー」を行いました。特にヒーローショーでは 001 教室の講堂を埋めるほどの子供達と保護者の方々の来場があり、講堂を埋めきったという達成感がありました。そしてヒーローショーが終わった際に子供から「楽しかった！ありがとう！」との言葉を貰い 1 年間を通して頑張ってきてよかったと心から思いました。

今年度からの試みで 1 年生の授業であるプレゼミと協力をして、「グローバルたこ焼き」を屋台として出店していただきました。学生達がグローバルを意識して創意工夫した沢山のユーモア溢れる“たこ焼き”があり、私はその中でもイカスミを使った“ロシアンルーレットたこ焼き”やローカルを意識して多摩味噌を使った“たこ焼き”が印象的でした。多摩祭に向けて何かを共に作り上げる達成感をプレゼミの 1 年生にも感じていただけていたのではないかと思います。

今年の多摩祭は 3500 人に及ぶ来場者の方にお越しいただき、盛況のうちに閉幕を迎える事ができました。最後になりますが、この場をお借りしてご来場いただいた皆様と多摩祭にご支援ご協力をいただいた皆様に、多摩祭実行委員一同、厚くお礼申し上げます。

来年も多摩祭に、ぜひともお力添えをくださいますようお願い申し上げます。

